

主論文の要約

木村敏の〈主語的〉〈述語的〉概念による心理療法

― 統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症を対象に ―

白井聖子

本論文は、現象学的精神病理学者である木村敏（1931～2021）の自己論における〈主語的〉〈述語的〉概念に基づき、木村（十一ら、2004）が統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム障害の共通の課題とした「自己の成立」の問題に取り組むための心理療法を論じたものである。

第1章では、木村の自己論である「主語的」「述語的」概念の変遷についての文献展望と、木村の「治療観」に関する文献展望を行った。

第2章では、本論文の問題を提示し、第1に木村の自己論を援用し統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症の自己を理解すること、第2に第1で得られた統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症の自己の理解を基に心理療法を論じていくことを目的とした。

第3章では、自閉スペクトラム症の2つの事例を提示し、自閉スペクトラム障害の自己の理解と心理療法について考察した。自閉スペクトラム症の自己は、木村の「自己」である「主語的な自己」「述語的な自己」との動的構造は成り立っておらず、自閉的であることに対し、内部完結した述語的部分と主語的部分の状態であることが明らかとなった。そのため心理療法では、セラピストがクライアントの滞った述語的部分と主語的部分の動きを促していくために、セラピスト自身の自己である主語的部分と述語的部分の連動を活用しながら関与していくことが必要であることを指摘した。そして、両者のあいだで互いの述語的部分が重なり合う点を見出し続けていくことによって、それぞれの主体が確かなものとして実感できるようになることを示した。

第4章では、統合失調症スペクトラム障害の3つの事例を提示し、統合失調症スペクトラム障害の自己の理解と心理療法について考察した。統合失調症スペクトラム障害の自己は自閉スペクトラム症と同様に、内部完結した述語的部分と主語的部分の状態であることが明らかとなった。統合失調症スペクトラム障害の場合では、定型的な日常の話であればセラピストとの述語的部分を共有することが可能であった。統合失調症スペクトラム障害の心理療法では、定型的な話題を共有していくことを治療関係の基盤としつつ、セラピストがクライアントの滞った述語的部分と主語的部分の動きを促していくために、クライアントの内部完結した語りを聞き続けることによって、セラピストはクライアントと一体となるような

体験が生じ、一時セラピストの主体は危機的な状態となることを指摘した。そして、互いの述語的部分の共有体験を通して、それぞれの主体が確かなものとして実感ができるようになることを示した。

第5章では、これまでの内容を総括し、総合的考察を行った。すなわち、統合失調症スペクトラム障害および自閉スペクトラム症の自己は内部完結した述語的部分と主語的部分の状態であると理解し、他者との述語的部分の共有が難しいため、「自閉」の状態として示していることが明らかとなった。そして両者に共通する「自閉」について、木村が示した方法としての「自覚」(1965)をセラピストが体験していることとして筆者が読み替えた。つまり、「自覚」とは、「他人における現象を、一度私の自覚に映して反転せしめることによってこれを知る、という方法」であり、それによってもたらされたセラピストの体験を用いて関わり続け、クライアントの述語的部分を共有していくことを行った。それは、クライアントの述語的部分に一体となるなど両者が述語的部分を共有した状態である「水平の〈あいだ〉」(木村 2008)をめざすことであった。これは一回限りのことではなく、何度も面接を通して繰り返していくことによって、「垂直の〈あいだ〉」(木村 2008)であるそれぞれの主体が生じていった。この「自己の問題」を抱えた統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症の心理療法では、木村(1967)の「根源的な自他同一の場所」である「水平の〈あいだ〉」の成立を目指し続けることこそが、「自己の成立」の問題に取り組むことになることを示した。そのためには、クライアントに対しセラピストが「主体としての他者」(1983b)として関与し続けることが必須であること、そして一時セラピスト自身の述語的部分と主語的部分が滞る状態となること、つまり自身の主体の危機に直面し続けることによって、「自己の成立」の問題を抱えた統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症の心理療法に取り組むことが可能となることを明らかにした。

本論文の意義は、木村の自己論を統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症の心理療法で具体的な方法として示したこと、ならびに木村は示唆のみであった自閉スペクトラム症の「自己の成立」の問題に対し心理療法を提示したことである。今後の課題は、さらに年齢層や状態像の幅を広げて検討し議論を重ねていくことであり、今後の展望は、他の病態などへの適用を検討していくことであると考える。